
彼女と歩こうっ

kuroyumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と歩こうっ

【Nコード】

N4845P

【作者名】

kuroyumi

【あらすじ】

雨っているんなものを運んでくるよね。地に恵みを、生き物に潤いを。俺は女の子を拾っちゃった。どうなるの？

？
(前書き)

雨っているんなものを運んでくるよね。地に恵みを、生き物に潤いを。俺は女の子を拾っちゃったよ。どうしよう？

？

雨は苦手だ。

いや、別にキザぶって言ってるわけじゃない。ついでに言えばキザぶったとしても

自分がそれほど冴えた顔立ちじゃないからクールにみえることもない。

酒を飲めばあんな女のことなんかすぐ忘れられると思ったのに、忘れるどころかむしろ鮮明に、付き合っていた・・・楽しかったころを思い出してしまった。

加えて鉦なたでぱっくりやられたみたいに頭が痛い。

ふらふらとクラゲみたいに道をさまよい、ふと気づくと古びた巨大ビルに挟まれた

路地裏にたどり着いていた。辛気臭い場所だな・・・まあ、今のボクの心にはぴったりだけど。

このままここで誰にも見られず、誰にも知られず死・・・うえっ。

出すだけ出して・・・口の中が少しひりひりするのは酸のせいか・・・？

全然まったく心はすつきりはしないが、身体は軽くなった気がする。

「けほっ」

先客がいたのか・・・。

ゆっくり路地裏の奥に視線を移すと、そこには少女が座り込んでいた。

・・・#・・・

初めて使う黒の絵の具みたいにツヤヤカな光沢を放つ黒髪・・・
いや、

光沢の色がおかしくないか？・・・赤色？

マネキンかと思った。

でも、人形にしては額から流れる赤い液体はなめらか過ぎるし、
人にしてはあまりに表情が無い。

「だいじょ・・・ば、ないね・・・」

微かに開いた口からは荒い息とルビーに負けないほど色鮮やかな・・・
血、が流れてる。

声が届いたのかどうか定かではないが、生きてるのは確かだ。

ええつと・・・こういったときは警察・・・いや、まずは救急車だ。

「だめ・・・」

ボクは”１１０”を押しかけていた指を止める。

重たそうに閉じられたまぶたの下から２つの黒い真珠がのぞく。

「だめ”って・・・いや、」

「だめ・・・」

言葉だけなら、彼女の言葉だけなら無視したはずだ。

だが、言葉以上に眼が雄弁に語っていた。「何も呼ばないで」・・・
と。

降り続く雨にさえ負けてしまいそうな彼女の弱った身体。

それとは対称的に射抜くような光を放っていた眼もやがて枯れるように閉じられた。

「どうすればいいんだ・・・」

ケータイを握り締め、自分に・・・そして少女につぶやいた。

・・・#・・・

？

酒の魔力が切れてくると、自分がどれほど大胆な行動をしてしまったのかに気づき、

とたんに恐ろしくなってきた。

他に方法がなかったとはいえ、部屋に見知らぬ少女を連れ込むなんて。

理性がちくちくと思考を刺す。

早く救急車を呼べ・・・いや、警察を呼べ。こんな怪しいやつを部屋にあげるな。

布団の上で横になる少女は寝苦しそうにしているが、まったく身動きをしない。

豊かな黒髪からは相変わらず血がゆっくり流れ出ている。

雨でしっとり濡れた服。シャツに黒のコートというあまりぱっとしない格好。

家出最中に襲われ怪我したのか・・・？家の人に知られたくないから警察はNG？

想像は広がるがしょせん想像。今の状況の手助けにはならない。

部屋の主なのに隅っこでうんうん唸^{うな}っていたその時、少女がうつすら眼を開けたのが見えた。

「・・・・・・・・」

細い首だけを動かし、たいして広くも無いボクの部屋を見回す。やがて少女はボクを認め、表情のない眼でひた、と見据えた。

「気分はどう？」

耳に届くはずの返事はなく。

代わりに視界に黒光りするモノが入ってきた。

少女はボクを見た瞬間起き上がり、懷から銃を抜き出したのだ。

「モデルガン・・・だよな？」

さっきまで浴びていた水はどこにいったのか。口の中が砂漠になる。

少女はゆっくり立ち上がり、両手で銃を構える。

小柄な少女と近代兵器はなぜか水と魚のようにぴったりと合っていた。

「どうして・・・？」

しばらくして少女は静かにそう言った。

「どうして呼んでないの・・・？」

「だって・・・キミが呼ぶなって」

「そう・・・」

銃口はぶれない。でも、彼女の真珠の眼が微かに揺らぐのが分かった。

彼女の額から流れる血が足元の布団を真紅に染める。

「血が」

「うん・・・」

「いや、”うん”じゃなくて、死ぬよ!？」

「うん・・・」

「とにかく座って、ね？・・・そうそう。」

「ほ、包帯あるからさ、いい？取ってきても」

「いい・・・持つてる・・・」

ボクの言うことに従ったのか、キツクなって座ったのか・・・。
銃を向けたままとはいえ、とりあえず大人しくしてくれた。

少女は懷から包帯を取り出すと、片手でぎゅっと握り締めた。
途方に暮れたようなその顔に、こんな状況なのにも関わらず、思わ
ずほは笑ましさを覚えてしまった。

「片手じゃ巻けないだろ？絶対、なにもしないから。銃置いて」

信じるだろうか？少なくともボクだったら絶対信じない・・・けど。

少女の眼がまた揺らぐ。ゆらゆらと・・・。

音も無く。畳の上に銃が置かれた。

すると包帯が紐解かれ、細い指が器用にそれを頭に巻いていく。
しかし、射抜くような視線はボクからぶれない。

こちらとしても何もする気はない。

少し考えると不思議なことだ。彼女は本物かどうかはさておき物騒
なモノで人をおどし

他人の部屋に居座ってる（俺が連れてきたんだけどね）不審人物な
のに・・・。

「ごめんなさい・・・」

「ん？」

「布団・・・」

まるで布団に誤ってるような言い方。

いや、もしかしたら本当にそうなのかも・・・。

素早く丁寧に包帯を巻き終わると少女はまた銃を手を取った。

しかし、今度はボクに向けられることは無く、すつと彼女の懷に納まった。

なぜ？いや、喜ばしいことではあるけど・・・。。

「あなたは・・・」

独り言のように少女は口を開いた。

まん丸の黒真珠が問うような視線を投げかける。

「約束、守るのね・・・」

「え」

「・・・」

強い光をはなっていた眼が閉じられる。

そのまま彼女は血まみれの布団にどたと横になった。

無垢で穢れを知らないその寝顔。

しかしその身にまとうのは純白のベールではなく闇を織ったようなコート。

手に持つのは天使のトランプेटではなく銃だった。

・・・#・・・

？

血まみれの少女にベットを占領され、ボクは部屋の隅で眠ろうと努力した。

何せ風呂とトイレを除けば台所もリビングも一緒くたの部屋だ。・
・気になってしょうがない。

しかし、ボクはいつの間にか眠りの世界に落ちていった。

朝日を浴びて目が覚め、自分が黄泉の世界にいないことに感謝した。

少女はすでに目を覚まし、畳の上に白い紙を広げ、その上で銃を分解していた。

小さい頃にモデルガンをやっていた浅はかな経験から言わせてもらうと

彼女の銃はどうも本物らしい。

1つ1つの部品が輝きを失ってこそすれ、精巧であり何より火薬と、そして血の匂いがこびりついていた。

「おはよう」

「おはようございます・・・」

ぺこりつと頭を下げ、少女は再び作業に戻った。

見ると布団まできちんとたたまれていた。

「あ・・・」

リボルバー式の銃を組み立て、ひょいと視線をボクによこした。
昨日の射抜くような眼とは違い、今は穏やかで人間味のある感じだった。

「朝ごはん、出来てます・・・」

物を置くという使用意義を忘れ去られたテーブルが久々に出陣していた。

上には逆さに伏せられたお碗とラップがかけられた焼き鮭、味噌汁入りの鍋。

日本の朝食を絵に書いたような光景がそこにあった。

「おお・・・意外に家庭的」

「・・・」

「い、いや、誉めてるんだよ」

針のような視線に思わず弁解の言葉が口をつく。

毒でも入ってるんじゃない・・・でも、殺す気ならとくに殺^やってるだろう。

ひよいひよい口に運んでみるとこれがまた・・・うまい。

「全部インスタントですけど・・・」

少女は相変わらずの無表情でそうつぶやく。

そうか。考えてみればボク^ちん家に鮭なんて洒落たものなかったっけな。

「・・・ま、とりあえずキミもどうぞ」

「では、いただきます・・・」

少女は手をあわせ、行儀よく食べていく。

どういう娘なのだろう？

ボクの真正面に正座する少女を見る。

ヤクザの一人娘。これが一番つじつまは合う。

しかし何かしつくりこない。彼女は大勢の人の上に立つ・・・群れるような人種には見えない。

荒野をさまよう一匹狼。雰囲気が一番合うのはこれだ。

「あの・・・名前聞いてもいいかな？」

「サヤ、です・・・」

「サヤちゃん、」

「呼び捨てていただいて結構です・・・」

「あ、はい。え〜とボクは冬月氷善ひょうしぜんといいます」

「よろしく願います・・・」

「あ、こちらこそ。よろしく願います」

部屋には味噌汁をすする音だけが響いた。

食事を終わるとサヤはテキパキと片付け、やるよ、というボクを制して

1人で全てやってしまった。

何もかも終わるとサヤはボクの前に突然正座し、頭を下げた。豊かな髪がさらさらと流れる。

「この度は誠にありがとうございました・・・」

「ん、いや、気にしないでいいよ」

「命を救っていただいたこの恩。命に代えましても・・・」

「大袈裟だつて。それに、困ってる人がいたら助けるのが当たり前でしょ?」

サヤはきょとんと顔をあげ、眼をぱちぱちさせた。

「理解できない」。眼がそう語っていた。

「そういうものでしょうか・・・」

「そういうもの」

サヤはひざの上に手を置き、憂げな表情を浮かべ小首をかしげる。しばしの瞑想の後、彼女の黒い眼がまぶたの下からひよっこり現われた。

「仕事がありますのでわたしはこれで・・・」

「”仕事”って・・・いや、何でもないよ」

本物の銃。そして昨夜の血まみれ。

聞かないのが無難というものだ。彼女のためにもボク自身のためにも。

ドアを押し開け、ボクにぺこつと頭を下げて、サヤは再び見知らぬ世界へと出て行った。

？

サヤと別れて1週間が経った。

こんな書き方をすると誤解を招きそうだが、サヤのことは大学の悪友たちにも

話してない。というより話したところで誰が信じる？

宇宙人やネッシーと同じく、彼女は”空想の中の住人”だ。

ゴ。ゴ13の敵役として登場するのが関の山かな。

ただ、サヤが宇宙人ともネッシーとも明らかに違うのは、彼女は確かに実在する血の通った人間だと言うことだ。

「夢みてえな話だな」

は？なにが？と、周りで馬鹿騒ぎする連中に、なんでもない、と答え酒をぐつと飲み干した。

・・・#・・・

頭の中で小人がハンマーを振り回してる。しかもトゲ付きの・・・。

馬鹿騒ぎのあとの悪酔いの攻撃に耐えながらふらふらと我が家に帰り着き

ばったりと横になる。

・・・あれ？なんで電気ついてるの？
そつえば鍵を開けた覚えも無いけど。

「お水、どうぞ・・・」

「ああ、ありがとう・・・え!？」

滝のように豊かに流れる黒髪。新雪すら薄汚れて見えるほどの白い肌。

整いすぎの、相変わらず感情の読めない顔。そして表情以上に雄弁に物語る真珠のような眼。

サヤがボクの部屋にいた。さも当たり前のように。

居座り強盗より驚いた。いや、強盗よりも安全・・・なのかな？

「ど、どうしてここに!？」

「長い話になりますが、よろしいでしょうか・・・？」

「なんかものすごく興味が出てきたから、聞きたいね」

サヤが問うようにまばたきした。

「わたしに興味が・・・」

「だいぶ飛躍してるけど、そういうことになるかな」

酔いはいつの間にかどこかに消え去り、ボクは部屋の中心に座布団を2つ敷き

とんと腰を降ろした。

サヤはボクがどうぞ、というまで決して座布団に乗ろうとはしなかった。

不法侵入をしていながら客としての礼儀を守るのは変な話だ。

サヤは話にくいのか、表情こそ読めないが、しばらく黙り込んだ。

畳に向けられていた彼女の眼がずっとボクに向けられた時、口も開かれた。

「あれからわたしなりに色々考えました・・・」

「キミが出て行っってからね」

「はい・・・」。

冬月さんは当たり前とおっしゃりましたがやはり理解も納得もできず・・・。

仕事にも身が入らなくて・・・ひさびさにミスショットをしてしまいました・・・」

「それは・・・すみません」

「なぜ、冬月さんが誤るのですか・・・？」

「いや、まあ・・・気にしないで」

「・・・ボス・・・わたしの上司から頭を冷やせと言われ、しばしの休暇をいただき、こうしてこうしてここに舞い戻ってきた次第です・・・」。

納得できるまで説明していただこうと思ひまして・・・」

安易にキザな台詞を言うもんじゃないね。今更ながらそう思った。

サヤは難しい問題に悩む子どものように見えた。

いや、その前に・・・」。

「なんでぐしょ濡れなの？」

今日は1日中ぽかぽか春日和だったはずだ。全国的に。それなのにサヤは全身しっとり濡れていた。

「頭を冷やせと言われたので・・・」

” ホントに冷やした ” わけか

「 ナイアガラの滝に打たれるのが一番だとも思ったのですが・・・」

「 ですが・・・? 」

「 経費がおりなくて・・・それで仕方なくこの町の山の中で滝行を・・・」

「・・・漢^{おとこ}だね」

「 生理学上、女性に分類しています・・・」

のどの奥から笑いがこみ上げてくる。

大真面目にぶっ飛んだことを言うサヤが可笑しくてたまらなかった。
サヤが小鳥のように首を傾げ、問うように瞬きする。

「 何でもないよ」

タンスの奥からタオルを引っ張り出し、サヤに渡す。

「 あ・・・」

「 え? 」

「 お風呂頂いてよろしいでしょうか・・・? 」

ナイアガラのかたりでくすぐったかった気分が屋根を飛び越えていった。

一緒に飛んでいこうとする心臓をなんとか元の位置に戻し人形のように座り込むサヤを見た。・・・ダメだ表情が読めない。

「え？」

「お風呂頂いてよろしいでしょうか・・・？」

相変わらずの調子でサヤは繰り返した。

彼女の眼が微かに潤んでいるように見えるのは錯覚なのだろうか？
なんとも判断しかねるボクであった。

？

今まで散々酒を飲む描写が入っていたから誤解してるかもしれないが

ボクはまだ20歳ではない。19だ。

まあ、19年も生きていれば彼女の1人や2人・・・実際は1人だが・・・いなかったことはない。

しかしこんな展開は初めてだ。

しかも相手は底知れない経緯と仕事を持っているとはいえ思わず二度見してしまうほどの美少女・・・そういえばサヤっていくつなんだ？

ボクとタメってことはないだろう。

高校生。これが妥当な線だな。

しかし、しかしだ、売春にならないか？

胃をかつさばいて、中に鉛をぶち込まれた感じがする。

タオルだけ巻いて「おまたせしました・・・」。なんて言われたら・・・。

今度は顔の裏側に太陽が放り込まれた。皮膚が焼ける。

「おまたせしました・・・」

しつとりと鴉の濡れ羽色で艶めき滝のように流れる髪。白い肌に吸い付く水滴の一粒一粒がやけに目に付く。

身にまとうのは・・・タオル一枚。

瞬きさえうとましく感じる。

色気のある・・・だけど、蒸し暑い日にさらりつ、と流れる一筋の風のような清潔感があつた。

それを台無しにしたのはサヤの右手に捕らわれた黒光りする”アイツ”だった。

触角をつままれ、じたばたじたばたと蠢く。

なぜ、そいつを手にな……！？

「お風呂に浮かんでいました……」

”アイツ”に視線を向け、石膏も顔負けの無表情でつぶやく。

「駆除しようかとも思ったのですが、

冬月さんのペットという可能性も否めませんでしたので……」

「勝手に居座ってるんだ！お引取り願ってくれ！」

「はい……」

サヤは小窓を開け、”アイツ”を放り投げた。

その後何事も無かったように手を洗い、「お見苦しいところを……

」と言って脱衣所に戻った。

言いよつの無い疲労感がボクの全身を包み、どきどきは心の奥底に引っ込んでしまった。

……#……

ちゃんとした服装で出てきたサヤは「いいお湯でした……」と言って深々と頭を下げた。

ボクは頷き、さっさと本題に入ることにした。なんだか疲れたから早く終わらせたかった。

「困ってる人がいたら助けるのが当たり前ってのはさ、
なんていうか……うん……そうだな……」

表情こそ同じだが、サヤの黒の眼はきらきらと輝く。

構えられる余計答えに詰まる。

1×-1が-1になるのを理論的に説明するのが難しいのと同じで
どうしてそうなのかは分からないけど、そうなるもんというふうに
理解するしかないんじゃないだろうか？

そういう趣旨でサヤに説明してみたが、彼女の眼は「全然分らない」と語っていた。

「相手を助けたいって気持ちはさ、そりゃあ打算とか・・・あゝ、
その・・・

下心・・・とかもあるかもだけど、やっぱり自然に湧き出るもん
だと思うよ、ボクは」

「自然に・・・ですか・・・。

では、冬月さんがわたしを助けて下さったときは無心だったと言
う事ですか・・・。

打算でしたら何か要求なさったでしょうし、下心がありましたら
襲ってるでしょうから・・・」

「・・・・・・・・」

「加えて約束まで守っていただいて・・・こんな得体の知れない相
手との・・・」

あ、自覚あったんだ。

「ですがやはりわたしには分かりません・・・。
見ず知らずの相手を無心で助けるという気持ちは・・・信じては
いけなかったんです・・・。

裏の裏を探ることこそ”当たり前”ですから・・・わたしにとっ

ては・・・」

サヤの言ってることが正論だろう。無心で他人を助けるのが当たり前？

鼻で笑われるのがオチ。それでも信じようとすれば痛い目にあうだけだ。

けど、それでも時々いるんだ。

自分を犠牲にしても他人を助けるバカが。まあ、ボクはそこまでの”バカ”じゃない。

「日本政府に依頼して保護してもらいましょうか・・・冬月さんを・・・」

「は？また話が変な方向にぶっ飛んでるけど」

「絶滅危惧種ですよ・・・」

素性も分からない、無愛想で、物騒で、訳の分からない他人を無償で助ける人なんて・・・」

「誉めてる？」

「誉めてます・・・」

サヤは懐から銃を取り出すと、リボルバー弾倉だんそうから弾を取り出しコートにしまった。

銃を懐にしまい、ナイフや盗賊の七つ道具みたいなものがじゃらじゃら付いたベルトを外した。

「わたしも人を信じてみます・・・。
ふつつか者ですがこれからよろしくお願いいたします・・・」

サヤは突然、座布団から降り、正座をした。
困惑するボクを尻目に手をつき、頭を下げる。

「え？ここに住む気？」

「お手本は近くにいるほうがいいので・・・」

人を信じる気持ちを学んだのはいいことだが、その前に社会の常識を学んだほうがいいんじゃない？・・・？
そう思えてならなかった。

？

「おはようございます・・・」

「・・・夢オチじゃなかったんだ・・・いや、こつちの話」

昨夜とまったく同じ黒いコートにホットパンツ。

コートは小柄なサラにしては大きすぎる気がしたが、その裏に銃やナイフをしまえるから

彼女にすれば機能的な格好なんだろう。

そうか、「ふつつか者ですが・・・」あたりから意識が遠のいて気絶したのか。

処理能力を超える出来事が起きると人は気を失うらしい。

「朝ごはん、できてますので・・・」

「ああ、ありがとう」

以前のインスタントの件を思い出す。

おや？今回は洋食か。

「フレンチトーストのインスタントなんてよく見つけたね」

狐色のトーストにはきらきらとたつぷりの砂糖がまぶしてある。

横には、ほこつと膨らんだホットケーキが行儀よく並び、

あとはサラダと牛乳が添えられている。

「今度は手作りです・・・」

「ホントに？すごいね、このホットケーキも？」

「はい・・・」

相変わらずの無表情だが、眼を見開き、何か言いたげに口を開けたが結局何も言わずに閉じた。

「いただきます・・・」

サヤはぽつとつぶやき、食べ始めた。

ボクも手を合わせた。

・・・#・・・

「え？」

ボクがすつきょんな声にサヤは視線を上げた。

ホットケーキとフレンチトーストの甘味のダブルパンチにボクの手が止まって

彼女は口を止めず、あっという間も無くたいらげた。

そればかりかコンビ二袋からパフェをすーっと取り出した。

「朝から？」

「変、ですか・・・？」

そう言いながらもサヤはスプーンを取り出し、カップを開けた。

「冬月さんの分もありますよ・・・」

もう1つ出てきた。

朝の食卓にパフェ。彩り的にはOKだが、胃袋的にはNG。少なくともボクは。

ボクが断ると、サヤは残念そうに「そうですか・・・」と言ったが眼はらんらんと輝きはじめた。

サヤは同じパフェを2つ前に並べると、うつとりと眺め、食べ始めた。

彼女は恐ろしいほど甘党だった。

・・・#・・・

「そういえばサヤって同じ服しか着てない気がするけど・・・気のせい？」

「かえをもっていますので・・・」

「え？どこに？」

サヤは壁にもたれるようにして立つ棚を指差した。

了承を取って開けてみると吊り下げられたボクの私服の下のスペースに

同じ黒のコートがずらりっ・・・と。

「吊るしていいから」

「ありがとうございます・・・」

「ちなみにこの箱は一体なに？開けてみてもいい？」

「わたしの下着しか入ってませんが・・・どうぞ・・・」

「・・・とめようよ、そこは」

伸ばしかけていた手をひっこめる。
ほっとしたような、残念なような・・・はあ、なんか振り回されてる気がする。

「にしても服がこれだけって困らない？」

棚の戸を閉めながら聞いてみたが、逆にきょとんとされてしまった。

「洗い回しで十分衛生面は確保できますし、刺繍もできますのでほつれや穴はすぐ直せます・・・」

「いや、そうじゃなくて、出かける時とか」

「・・・」

「その日の気分に合わせてみるとか」

「・・・」

「おしゃれしてみるとか」

「・・・」

「すみません。余計なお世話でした」

「いえ、まったく全然気は進みませんがたまにはいいかもしれせん・・・」

サヤはホントに乗り気じゃなさそうな顔してる。
そんな顔されると皮肉のひとつもいいたくなる。

「毒舌家って言われない？」

「・・・」

凶星か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4845p/>

彼女と歩こうっ

2010年12月14日01時06分発行